寄稿

農『能』と共に五百年「黒川能」

黒川能伝習館
館長　清和　庄右工門

能を育てた風土

「すべて吹きの寄するところこれ月山なり」。森敦の『月山』にみる霊峰月山を東に、遙かな庄内平野の北に鳥海山、西に朝日連峰、金峯山を望み、山伏修験でしられる羽黒山のそばに能の里、山形県櫛引町黒川がある。

日本海より吹きつける横なぐりの季節風、降り積もる雪が逆巻き、天地凍てつく旧正月、春日神社王祇祭が行われる。神霊が宿る王祇様を民家にお迎えし夜を徹して能を舞い、神との饗宴がひらかれる。「その場に身をおくとき、まさに現代には失われてきた日本人のふるさとに巡り逢う心地がする」、とは誰の言葉か。

黒川能の構造

黒川能は世阿弥が大成した後の猿楽能の流れを汲み、現五流と同系であるが、いずれの流儀にも属さず独自の伝承を続け、演目演式などに古式を残している。曲目も能五百四十番、狂言五十番、というように民俗芸能としては誠に大きな規模といえる。

黒川能が最も盛大に舞われるのは王祇祭である。当屋とよばれる民家の神宿に、全ての氏子を招き一座饗宴を開く。その後夜を徹しての演能である。幼児の舞う大地踏、所佛則とよぶ翁の式三番、脇能、修羅物、鬘物等、現在物（四番目物）、祝言物と能五番、狂言四番が組まれ、毎年演目は当屋に依り選ばれる。当屋とは、座中の最年長の長老が頭人となり託宣により国司（例えば出雲守、上總守等）の名が授かる。この頭人が、数百人をも動員する大がかりな祭事をとり行う所謂司祭者である。

祭りは、上座、下座がつねに連携を保ちながら、あるときは、対立、時には激しく競い争う。二つに分かれ対立することは、分裂し分離していくことではない。深く連帯し、より高く統一するためであり、すばらしい対の思想と云えるのである。

源流考

村の人びとは、黒川能の流儀を大内掛りと信じてきた。大内がかりの能とは、禁裡、つまり高貴なものの流儀をさす。貴種流離のたぐいの伝説であると云われているが、今も在って神聖視されている狩衣（紅地蜀江文黄緞狩衣、藍紅紋紗大極図印金狩衣）は国の重要文化財に指定された至宝であり、この狩衣は、両座の能太夫が翁の伝授をうけ襲名披露に一生一度の着用とされるのである。

領守の保護、そして今

黒川能のような中世に溯る古い民俗芸能は、その起源や経緯など不明とされているのが多いが、室町時代庄内を領有していた武藤氏との関わりが大きいと云われている。武藤氏は、室町幕府足利義政とは、上洛の際、勧進猿楽能を共に観ている。その折京都、近畿より猿楽役者を呼び寄せ保護したのが起因とも云われている。その後、上杉氏、最上氏と領守の保護は厚く、元和八年、酒井氏の入部となり、社領石高増、上覧能と称す城内演能の度毎に、能装束、能面、金品等、莫大な褒賞に与った。だが黒川能役者の殆どは、木綿着物、袴の用意もままならぬ貧しい農百姓であることには変わりなかった。ただ藩主上覧は黒川の人々にとっては、光栄この上もない誇りとしたものと思う。信仰と誇りを支えに、「家族と村」の平和を維持、「能は農に通じる」の魂は黒川の人たちに長く長く息づいてきたのである。

今、近代化の名のもと、時代の趨勢は黒川の流れを捲きこむように押し寄せてきた。如何に乗りきるかである。伝統文化黒川能の継承は、自然の恵みを享受する魅力ある農業と若者の定住にある。